【中野の歴史－近世編15－】 彰義隊と中野

2016.11.04 UP 投稿者：まるっと中野編集部

[中野の歴史] [近世編]

左／彰義隊隊士が傷の手当を受けたと伝えられている椎の木(歴史民俗資料館の園庭)　右／彰義隊隊長が置いて行ったと伝えられる徳川斉昭の書(歴史民俗資料館所蔵)

明治元年(1868)５月、維新最後の激戦であった上野戦争が終結し、旧幕臣で構成された彰義隊隊士が敗走してきました。

中野でも、その一隊が宝仙寺・慈眼寺あたりに敗走して助力を求めてきましたが、素行も悪い隊士も多く、青梅街道筋では住民が団結して協力をこばみ、村内には入れなかったといいます。
一方、北部では別な話が伝えられています。村々では彰義隊の敗走を聞いて、皆、雨戸を閉ざして、安全な場所に避難する人々が多かったといいます。そんな中、江古田村名主家山﨑家では、門前で雑炊を炊いたり、傷の手当をするなど、手厚くふるまいました。

その時、隊長が「徳川の世が挽回したら、これを持って名乗るように」とお礼に置いていった掛け軸が、湯島の聖堂から持ち出した「徳川斉昭」の書でした。この書は今でも中野区立歴史民俗資料館
に保管されています。その後、一隊は埼玉県飯能をめざして退却していったそうです。

また、この時、隊士の傷の手当をした場所が、資料館の庭にある「椎の木」のたもとであったと伝えられています。
樹齢が400歳とも600歳ともいわれる椎の木は中野区の天然物に指定され、今も歴史を見つめています。

(中野区立歴史民俗資料館館長　比田井克仁)

※問い合わせ先の記載がない記事については、まるっと中野編集部までお問い合わせ下さい。
　掲載場所近隣の区民の皆様に直接お問い合わせすることはご遠慮いただきますよう、お願い申し上げます。
※掲載情報は全て記事取材当時のものです。